日本人を裁くもの

２０１２年５月
西九州伝道所
佐々木正明

日本の福音宣教が思うに任せない状態にあることは、誰でも認めます。自由に宣教活動が出来る中では、日本は最も宣教の困難な国です。いったいその理由はどこにあるのか、多くの人たちが論じてきました。理由はいくつもあります。筆者もそれらについていろいろと考えて、文章を書いてきました。今回はまた、少々異なった角度から論じたいと思います。

Ｉ．　律法により裁かれてきた日本人

日本での福音宣教は、日本の文化と宗教に対するかなり強い敵愾心と、軽蔑、侮蔑、あるいは憐憫の情から行われてきました。

Ｉ．A.　文化的使命感

アメリカやイギリスの近代宣教には、二つの大きな推進力があったことが知られています。一つは純粋な福音的動機で、全世界にキリストの救いを伝えたいという、和解の福音を委ねられた者としての使命感です。もう一つも福音に関係しますが、自分たちの文化、つまり、彼らが理解した「キリスト教文化」は世界で最も素晴らしい進んだ文化であり、これを他の地域の人々にもたらすのが、自分たちの使命であるという、いわば文化的使命感とも呼べるものです。特にこれは、千年期後再臨説を採る当時の福音派主流の神学と共鳴して、世界中に自分たちの進んだキリスト教文化をもたらすことによって、世界をより良いものとし、キリストの再臨を来たらせるという情熱になって現われました。

最近では千年期後再臨説を採る福音派諸団体の宣教力が衰えたことと、自分たちの文化を他の文化より優れていると、単純に考える人たちが減ったことにより、以前ほどそのような感覚を持つ宣教師は少なくなったとはいえ、まだ、ときおり見ることができます。このような宣教師は行くところ行くところで、その土地の文化を時代遅れの劣悪なものと考え、情熱をもって容赦なく批判し、敵愾心と優越感と憐憫の情で裁き続けたのです。それ

が福音宣教の一部であると信じて、少しの痛みも感じなかったのです。数世紀前のカトリックの宣教が、三つの G、すなわち、ゴールド、グローリー、ゴスペルに押し出されて進められたのよりは、まだましだとは言え、大きな傷を残してしまいました。

とくに、一つの国あるいは地域が類似した文化を持ち、その文化に強い誇りと共通意識あるいは一体感を持つところでは、キリスト教宣教に対する疑惑と敵対心は非常に強いものとなりました。その代表的なものが日本です。日本の宣教がはかどらない理由の一つはそこにあります。宣教師が文化的優越感と敵愾心をもって福音宣教に当たったとしても、結構成果を上げている宣教地もあることは事実です。国家として、あるいは民族としての共通意識や一体感が弱かったり、誇りとできる強い固有の文化を持っていなかったりすると、人々の心は高圧的な宣教師たちの態度に憤るよりも、彼らがもたらす進んだ文明とキリスト教信仰を含んだ文化を、喜んで受け入れる方に傾いたのです。

欧米の宣教師たちは、始めから日本の文化を劣ったものと決め付け、日本の宗教を偶像礼拝と断罪しながらやってきました。そのために、素晴らしい福音を語りながら、多くの日本人を敵に回してしまいました。そしてわずかに得た日本人の改宗者たちを、「西欧キリスト教かぶれ」に仕立て上げ、自分たちの国の文化と宗教をさげすみ、激しく攻撃する者たちを作り上げてしまいました。これらの改宗者の多くは、始めから西欧志向をもったごくわずかな日本人、文明開化に心躍らせた新しがり屋で、一般的日本人を代表するものではあり得ませんでした。ですから、日本でのキリスト教宣教は、日本文化に対する敵愾心、何としてもこれを破壊し、より優れたキリスト教文化と取り替えなければならないという、文化的優越感、あるいは文化的侵略主義とでもいう精神を背景に行われたのです。

Ｉ．B.　日本側の事情

開国をして、宣教師たちも受け入れざるを得なかった明治政府は、数世紀前のカトリックの宣教のときの記憶や、当時集めることができた様々な情報から、キリスト教は西欧列強の植民地主義の手先であるという、強い疑惑を持っていました。それで、彼らは西欧の進んだ知識や技術はいち早く取り入れても、宗教は絶対に受け入れてはならないと判断していたのです。為政者たちは、西欧植民地主義者たちの精神的土台はキリスト教であると喝破し、彼らが植民地で行った行為があまりにも人道に反したものであって、日本人の精神風土には合わないと看做して、これを排除しようとしました。

彼らは、自分たちの新生国家にも、西欧キリスト教国家が持っているような、精神的支柱が必要であると判断しましたが、断固としてキリスト教を排除したのです。その代わりに導入されたのが、国家神道であり天皇制でした。そのような為政者たちが高揚したのが

「大和魂」であり、新たなスローガンとして打ち出されたのが、昔から言われていた「和魂漢才」もじった「和魂洋才」です。これをもって、日本は西欧諸国に追いつき追い越さなければならないと考え、ナショナリズムを謳い富国強兵を唱えたのです。

プロテスタント・キリスト教が盛んに宣教を始めたのは、まさにそういう時代でした。明治政府が、何とかして国家神道と天皇制を主軸に日本古来の文化をもって、日本人としてのアイデンティティを形成しようとしているそのさなかで、日本文化を卑しいものと考え、神道を敵とみなす宣教師たちが、優越感と敵愾心とをもってキリスト教を宣伝したのです。日本での宣教がはかばかしくない理由の一つは、「しょっぱな」から日本の文化を敵に回し、日本の宗教を糾弾しながら行われたことにあります。

徳川幕府は、植民地主義のスペインから日本を守るために、スペインの手先となっていると思われたカトリックの勢力拡大を阻止しようと、激しい弾圧をくり返して多くの殉教者を出しただけではなく、おもに仏教を利用して、キリスト教は怪しげなもの、面妖なもの、危険なものというイメージを、一般大衆の中に作り上げてきました。この政策は、大いに成功し一般大衆は、キリスト教を非常に恐れるようになったのです。明治の開国を迎えて、実際に宣教師や白人クリスチャンたちを見ることになった大衆は、日本の文化と宗教を蔑む彼らの高飛車な態度に驚き、その怪しげさ面妖さ危険さが事実であると、思い知らされることが多かったのです。教育や社会福祉の面で大きく貢献したと認められるキリスト教ではありましたが、このような強烈な負のイメージを払拭することは、まだ出来ていません。

Ｉ．C.　旧約の律法をそのまま適用した西欧宣教師たち

西欧の宣教師たちが日本の宗教を偶像礼拝と看做して糾弾したのは、おもに旧約聖書の律法にのっとったものと言えます。たとえ新約聖書の適用として偶像礼拝を責めたとしても、新約聖書もほとんどの場合、旧約聖書の延長線上で偶像礼拝を責めているからです。旧約聖書が、偶像礼拝をしないように厳しく戒めていることは、誰でも知っているとおりです。ただしそれは、選民イスラエルが神の民としてふさわしい信仰態度を保つための戒めであり、異邦人のためではありません。そして新約聖書は、それをクリスチャンにも適用しているのです。

イスラエル民族とクリスチャン以外は、この旧約聖書の律法を適用されるべきではありません。ところが、二千年にもわたる「キリスト教文化」の中で、自分たちの文化に都合よく構築された神学をもって、宣教師たちは日本にやってきたのです。福音の届いていない文化で生きている人々のことを、深く理解しようとした神学者はいませんでした。自分

たちが働く土地の文化を尊重しようなどという宣教師も稀でした。多くの神学者は異邦人の立場になって考えることが出来ませんでした。そのような文化は、自分たちの優れた「キリスト教文化」に、取り替えられるべきものであり、学ぶべきものではなかったのです。

それればかりか、「キリスト教文化」に生きていた人々の多くは、自分たちのような白人以外の人々を、人間と認めることさえなかったのです。「天は人の上に人を作らず。人の下に人を作らず」という有名な言葉は、福沢諭吉のオリジナルではなく、もともとアメリカの大統領だったトーマス・ジェファーソンが独立宣言の中で、高々と語った一節だったようですが、ジェファーソンの平等の意識は白人たち間だけのもので、有色人種は含まれていなかったことが知られています。アメリカ・インデアンの歴史を学ぶまでもなく、黒人奴隷とその子孫たちの歴史を紐解くまでもありません。

そんな時代ですから、ほとんどの宣教師たちが旧約聖書の律法によって、異教の文化を偶像文化と決め付け、神の激しい怒りと厳しい裁きの対象であると考え、何としても、自分たちの優れた文化とキリスト教信仰を行き渡らせなければならないと、あたかも神の代弁者になったような気持ちで情熱を傾けたのも、理解してやらなければなりません。しかし、彼らがやったことは正しくなかった。聖書の教えではなかったという事実は、はっきりさせておかなければなりません。

Ⅱ.　異邦人である日本人を裁くのは心に記された律法と良心

聖書が語る偶像礼拝の罪は、わずかの例外を除いては、イスラエルの民もしくはクリスチャン達に向けられたものです。そのわずかな例外のひとつが、ローマ人への手紙の 1 章です。そこでは、当時の習慣に習って、すべての異邦人が「ギリシヤ人」という言葉でくくられていますが、人類全体の偶像礼拝の罪が語られているのは明らかです。（ローマ 1：18～32）　それに続いて 2 章には、律法を持たない者すなわち異邦人は、律法によっては裁かれることがないと、明確に記されています。(2：6～16)　たとえ旧約聖書の律法を持たなくても、彼ら自身が律法であると教えられ、律法の要求が、彼らの心に記されていて、それを彼らの良心が証をしていると語られています。

Ⅱ. A.　異邦人は旧約聖書の律法によっては裁かれない

まずはっきりしているのは、律法を与えられていない異邦人は、律法によって裁かれることはないということです。神が日本人をお裁きになるとき、旧約聖書の律法を基準として、あるいは旧約聖書の律法に照らし合わせて、お裁きにはならないということです。神がお裁きになるとき、旧約聖書の律法を用いられないのですから、日本人は誰によっても、

律法をもって裁かれるべきではないのです。ですから、欧米の宣教師や欧米の神学を学んだ牧師たちが、日本人を律法によって裁くのは間違っているのです。欧米の聖書学者も神学者も、ローマ書 2 章で教えられていることについては、良く知っているはずです。ところが、自分たちが「キリスト教文化」の中に生まれ育ったために、「異邦人」というものにあまり考察を加えていないのです。異邦人の立場に立って物事を見る必要がなかったために、見落としているのです。日本人を裁く基準は、イスラエル人に与えられた旧約聖書の律法ではなく、日本人の心に記されている律法なのです。（2：14、15）私たちはこのことを、よくよく心得、理解し、その上に立った行動をしなければならないあのです。

ローマ書の記述では、心に記された律法と良心との関わりが、いまひとつはっきりしませんが、「心に記された律法」と「良心」とが分けて語られているのは、パウロのレトリックでまったく同じものと解釈しても、大きな間違いではないと思います。ただしここでは、心に記された律法とはより本源的な、神の聖さの反映、善を願い正義を追及する本能的欲求のことであり、時と場所を問わない不変普遍のものであると考え、良心とはその本源的で不変普遍の善と正義を求める心が、社会の環境、教育、育ちなどで実状に応じて、適用されて出てくるもので、常に変化するものと理解して論を進めていきます。いずれにせよ、神は、異邦人ひとりひとりの心に記されている律法を基にして、彼らをお裁きになるのです。

旧約の律法と同じように、心に記された律法も良心も人を救うことはできません。しかし、律法と同じように人に罪の自覚を生じさせ、人を罪に定めます。パウロは同じローマ書の中で、律法が養育係であり、福音へ導くものであることを教えています。律法は罪の自覚を生じさせるもので、律法がなければ罪もないとも語っています。この場合の律法は、直接的には旧約聖書の律法のことですが、この 2 章によると、異邦人の心に記されている律法も同じ機能を持っていることが分かります。ですから、旧約聖書の律法を持たないまま罪を犯す者も、旧約聖書の律法を持たないまま滅びるのです。律法を持っていないという事が言い訳にはなりません。神の聖さが写し与えられている、心の律法があるからです。彼らは滅びるのです。（ｖ．12）

Ⅱ．B.　日本人を裁く日本人の心に記された律法

パウロの教えを延長すると、日本人を裁くのは旧約聖書の律法ではなく、日本人の心に記されている律法であり、日本人の良心だということが明白です。旧約聖書の律法は、確かに参考となり、参照され、学ばれてもいいでしょう。その教えを取り入れるのもよいでしょう。しかし、それを持って日本人が裁かれてはならないのです。日本人は、他の国々、民族、文化から荒海によって隔離された、独特の地形の中で独自の文化を形成してきまし

た。日本人の良心は、そのような中で、心に記された律法を礎にして育まれてきたのであり、その日本の文化をよく理解しない外部のものが、日本人を裁いてはならないのです。西欧人が西欧の文化の中で作り上げた秤によって、日本人が量られてはならないのです。

国際化の加速によって、日本の文化も大きく変化し、日本人の良心にも変化が起こっていることでしょう。そのようなことを正しく判断し、それをもって日本人ひとりひとりを裁くのは、全知全能の神様のお仕事であり、宣教師や牧師の仕事ではないのです。自分たちを旧約時代の預言者のように考えて、民の罪を糾弾するなどと言う考え方は、素直な聖書の解釈からは出てきません。宣教師の仕事は、福音を語ることです。福音をしっかり理解させるには、深く強烈な罪の自覚が不可欠だと考えたとしても、その罪の自覚を、他の文化で形成された律法や他の民族に与えられた律法で、促してはならないのです。

日本人の罪の自覚は、旧約聖書の律法によってもたらされるべきではなく、日本人の心に記されている律法によってもたらされるべきです。日本人が日本人の感覚で、罪の自覚を持てるように導くべきなのです。そのために、日本の文化、日本人のものの考え方、日本人の価値観、日本人の罪悪感など、すなわち日本人の良心をよく知るべきなのです。ただ、それほど専門的な学びしなくても、日本人に、自分が理想としている生き方、良心の標準に達した生き方を、することが出来ないでいるという事実を自覚させれば、旧約聖書の律法を持ち出すまでのこともなく、自分の心に記されている律法から、罪の自覚に至らせることが出来るはずです。

では、日本人は日本人の心に記されている律法と、良心によって裁かれるべきだとすると、外国人たちは、日本人の倫理や道徳についてはいっさい口をはさむことが出来ないのか、あるいは反対に、日本人は外国のもののやり方に、何も言うべきではないのかというと、そうではありません。日本人の心に記されている律法は、他の多くの国の人々の心に記されている律法と同じです。そこから発展させられる良心が、文化や環境によって変化に富むものとなったとしても、共通の土台、あるいは原則的な基盤とでも言うべきものがあるのです。

日本人の良心は、諸外国の人々の良心とは異なっています。具体的な物事の判断が異なるのです。日本人の良心は、日本の独特な環境によって育まれたのですから、日本人を褒めたり追及したりする前に、日本人の感覚、価値観、世界観、倫理観を理解する努力をしなければなりません。たとえ外国人が、日本人と共通の感覚や価値観、あるいは世界観や倫理観を持つことが出来なくても、それを理解する努力を怠ってはならないのです。自分たちの価値観や世界観や倫理観をもって、他の文化に生きている人々を裁いてはならないのです。旧約聖書の律法は、ユダヤ人に対して与えられたものであり、ユダヤ人に与えら

れたものをもって日本人を裁いてはならないのです。日本人は、日本人にも与えられている心に記された律法と、日本人の良心を基準にして裁かれるべきなのです。

Ⅲ.　心に記された律法と日本人の良心

昔から性善説と性悪説の二つが、果てしない議論となっています。理論的にはどちらに軍配を上げることもできませんが、日本人は、基本的に性善説に立って社会を形成しています。これに対して、キリスト教の倫理では、一般的に堕落説というのを主張しています。つまり、人間は本来良いものとして造られていたのだけれど、罪によって堕落して、悪が入り込んだという考え方です。

Ⅲ．A.　心に記された律法の源

聖書によると、人間は神に似せて造られています。神の性質を写し与えられているというのです。ですから、すべての人間には、神の聖さも写し与えられています。この神の聖さの写しを持っていることこそ、人間が人間であるひとつの証なのです。心に律法が記されていることは人間の本質的部分に関わります。そしてこの心に記されている律法とは、善を求め、義を追求して生きようとする、本能的欲求だと思われます。これはちょうど、すべての人間に霊的感覚が本能として備わっているのと同じです。すべての人間が、見えない神を感じる感覚を持っているのと同様に、善を愛し義を行いたいという欲求を持っているのです。

その人間の心に記された律法は、人間が罪のために堕落して、悪魔の支配の下に降ったために、薄くぼやけてしまっています。もともとの鮮明さは残っていないのです。それは悪魔の支配の下に落ちた自然が、破壊され歪曲されているのと同じです。人は額に汗して働かなければ、満足な収穫を得ることができなくなりました。人間の体もそこここに傷みを生じました。女は子を産むために、産みの苦しみをしなければならなくなりました。（創世記 3：13～19）　でも自然は今も神の恵み深さを現し、体は私たちに命を謳歌させます。人間に与えられた神に似た姿は、ゆがめられ、崩れてしまったとはいえ、まだしっかりと残っているのです。心の律法は薄くぼやけてしまったとはいえ、失われずに留まっているのです。ぼやけてしまった心の律法から具体的に現れてくる良心は、捻じ曲げられ、歪められ、ひどく破壊され、弱くなっていることでしょう。とはいえ、その良心は間違いなくすべての民族すべての部族に存在し、彼らの社会でそれなりに機能しているのです。

Ⅲ．B.　完全に堕落し切ったと考える誤り

以前から、プロテスタント主流派の中に、人間の堕落は徹底していて、良いものはなにひとつ残っていない、完全に堕落しきっているかのように主張する人たちがいました。自然の人間、生まれたままの人間の中には、善を求める心や神を求める心はまったく残っておらず、神の特別な恵みの働きかけがなければ、人は神を訪ね救を求めることさえできないというのです。彼らはこれを普通、先行恩寵などと呼びますが、人が救われるためには、救われる前に、神の絶対主権による聖霊の働きかけを必要とするというものです。もちろん私たちは、救われる前の聖霊の働きかけを否定するものではありません。かえってそれを大いに強調するのですが、人間に神を訪ね、救いを求め、善を喜び、義を追求する能力は残っていないとする見解は、聖書の教えとはかけ離れたまったくの間違いです。人間の中の神に似せて造られた部分は、たしかに罪によって薄められ、捻じ曲げられています。でも失われてはいないのです。人間は完全に堕落して、良いものは一つとしてないという理解は、自分の罪意識の強烈さの故の、主観的告白としては納得できますが、客観的事実としては、否定されなければなりません。

ただ、そのような完全な堕落を主張する神学を背景にもつ宣教師や牧師たちは、日本人とその文化を完全に堕落し切ったものとして見、罪の自覚に導こうと、旧約聖書の律法をもって激しく責める傾向を強くしたのです。日本人の良いところ、日本文化の優れたところに、あえて目を瞑って見ないようにし、日本人独特の神道的宗教心の美しいところ、ゆかしいところにも顔をそむけて、もっぱら自分たちの宗教観と文化を押し付けてきたのです。

もちろん、このような西欧キリスト教の姿は、今はおおかた時代遅れのものになってしまいました。文化を比較研究する学問が盛んになり、文化はそれぞれその社会にあって固有なものであって、複数の文化を比較して優劣を語ることは、間違っていると言われるようになりました。それがキリスト教の中にも影響を与え、特に、社会派的傾向を持つ団体や宣教師たちの間に受け入れられるようになって、久しくなります。とはいえ、自分たちの「キリスト教文化」をよりすぐれたものと感じ、ひそかな優越感を持って活動している宣教師たちが、まだまだたくさんいます。そのために、宣教地の人々とその文化に対する洞察が浅く、一方的な押し付けが続いています。

Ⅲ．C.　居住環境と良心

個々の人間の良心の基準や個々の社会の良心の基準は、それぞれの文化や教育や宗教や育ちによって、かなり異なります。同じ良心の働きが、あるところでは死刑反対論となって現れ、他のところでは死刑賛成となって機能するわけです。ですから、異なった文化の人間が、自分たちの基準で他の文化の人間を裁いてはならないのです。

人の良心を形成する要素はたくさんありますが、なかでも、居住環境が最も強い影響力を持つと考えられます。たとえば日本人は、日本列島というかなり隔離された土地に生き、侵略してくる異なった民族や国家を恐れることもなく、彼らがもたらす侵略的文化に適応する必要もないまま、稲作という非常に定着性の強い社会を作り、当然のように、良い人間関係を築くことを最重要とした文化を形成してきました。それでも、中国や韓国に、自分たちに益になる文明文化があると知れば、いのちを賭けてでも、それらを吸収しようと努力することもできました。歴史は変わり、生活環境も変わったとしても、この定着性の強い稲作文化は、つい最近まで、日本人の倫理道徳、社会形成に影響を与え、日本人の良心をはぐくんできたのです。

定着性の強い日本の社会の中では、人は生まれてから死ぬまで、同じ人たちと付き合い続けることを前提に、非常に親しく細やかな人間関係のまわりに倫理が発達し、良心が形成されました。一緒に住んでいる人たちの幸せを願う心、つまり思いやりだとか、寛容だとか、親切だとか、他人の痛みを知るなどという、細やかな倫理に良心が表されてきました。あるいは、他人を傷つけない、迷惑をかけない、他人が嫌うことはしないというような、消極的な面も強調されます。一時限りの付き合いではなく、一生涯の付き合いが前提となるために、先を見越した人間関係の構築に力が注がれたのです。

当然、社会が丸く治まり皆がそこそこ幸せになれるように、あらゆることにおいて和、あるいは調和、譲り合いが配慮されます。善悪を徹底的に暴いて裁くようなことはせず、和解を大切にし、「三方一両損」などということも、理想として語られます。痛み分けが普通の社会になります。よりよい人間関係を作り、円滑な社会生活が保たれるように嘘をつくことも当然とされ、社会の中で積極的に容認されます。

Ⅲ．D.　移動性の激しい生活環境との違い

一方、移動性の激しい居住環境の中では、それに適した倫理が発達し、それに合致した良心が形成されました。麦を作り家畜を育てる、比較的移動がたやすい居住環境に生きる人々は、一生にわたって同じ人たちと付き合う確率は低いのですから、それに合った倫理を発達させます。牧畜を中心に騎馬生活を営む人たちの倫理では、自分たちの小さな仲間の間の付き合い方と、めったに会うことがない仲間以外の人たちとの付き合い方は、当然大きく異なります。隊商を組み駱駝に乗って砂漠を行き来する人々は、再び出会うことがないことも想定して、いちどきりの倫理に生きることになります。そこで大切なのは、思いやりだとか将来を見越してなどということではなく、今の事実です。良い品か悪い品か、事実か虚偽か、嘘か本当か、騙されていないかどうか、信頼から始めるのではなく、始め

から疑ってかかるのです。家族や親族、あるいは友人に対する感覚も異なってきます。善悪の判断も違ってきます。それぞれの生活に適した良心の適応が行われるのです。

日本でも、「旅の恥は掻き捨て」という感覚があります。再び会うことがない人たちとの付き合いは、いつも一緒にいる人たちとの付き合いとは異なるのです。開拓期のアメリカのように、幌馬車に乗って広い土地を自由に行き来し、気に入った場所を見つけて定住しようとした人たちの倫理は、日本の倫理とは異なって当たり前です。異なった国から来た、異なった言葉を話す、異なった民族が旅先で会い、そこでやり取りする商売は、10 年後のことなど考えません。しかも彼らは、行く先々で先住民であるアメリカ・インデアンと争い、土地を奪い取らなければなりませんでした。彼らが作り出す倫理は、いくらキリスト教の背景があるといっても、日本のような穏やかな倫理とは違ったのです。

Ⅲ．E.　旧約聖書の律法と倫理

まだまだ移動生活を中心としていた、当時のイスラエルに与えられた旧約聖書の律法は、その時点での彼らの生活に適した律法として、神から与えられたものです。確かに代々守るべき掟として与えられたとしても、永遠に不変の掟ではあり得ませんでした。そのために、同じイスラエルであっても、千年以上も後のキリストの時代のイスラエルには、そぐわないところも多々出てきたのです。キリストは、社会の実情に沿わなくなってしまった安息日の掟を、「人間が安息日のためにあるのではなく、安息日が人間のためにある」と教えて、実状への適応を行っておられます。

安息日の掟を永遠の掟、あるいは普遍的な律法と理解して、今でもそのまま守り続けようとしている、現代イスラエルにおける安息日の遵守は、まさに珍糞物ですが、彼らはそれを、それこそ「宗教的熱心さ」で行っているのです。ましてやその安息日の律法を、文字通り現代の日本と日本人に適用するのは、土台無理な話なのです。旧約聖書の律法の大部分は、神のお求めになる原則的な倫理ではなく、その原則的倫理の時代と環境に合わせた適用なのです。大切なのは、適用から遡って原則を探り、その原則を現代の日本に適用することであって、３千年以上も前のイスラエルに適用された倫理をそのまま持ち込むことではないのです。

すべての異邦人には、極めて原則的な「心に記された律法」、神から与えられた本能的部分と、それを社会的環境に応じて発展させた適用部分の「良心」が備わっています。当然神は、そのようなこともご存知であり、あらゆることをことごとく理解して、ひとりひとりを裁いてくださるのです。

Ⅳ．　日本人の良心

日本人の倫理観が非常に高いこと、公徳心が非常に発達していることは、良く知られています。もちろん例外もたくさんありますが、一般的に日本人だけではなく、多くの外国人にも驚きをもって認められるところです。ひとに聞いた事ですが、最近どこかの国の調査機関によると、日本人の６パーセントがクリスチャンだそうです。隠れクリスチャンがいるのでしょうか。それは、キリスト教式の葬式が、キリスト教信徒の数に比べて、異常に多いという統計から、出てくる結論だそうです。

でももっと驚くべき数字は、３０年以上前に、イギリスのある調査会社が行った調査の結果です。それによると、確か・・・・細かいことは忘れましたが・・・・日本人の６０数パーセント以上はクリスチャンだということでした。驚いた人たちが問いあわせたとろ、ドイツ人の６０パーセントがクリスチャンだというならば、日本人はそれより多くクリスチャンだということでした。つまり、ここでいうクリスチャンとは「クリスチャン度」のことです。個々の日本人が、あるいは日本の社会が、どれほどキリスト教倫理に近い生き方をし、キリスト教倫理に合致した社会を形成しているかということです。１００人のうち何人がクリスチャンかということではないのです。ちなみに、アメリカはかなり低いところにありました。たしか、ニューヨーク市の犯罪発件数は日本全国の犯罪発件数に近いようなことも、聞いたことがあります。

日本の安全は世界でもトップクラスです。イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、スペインなどの西欧キリスト教諸国のどこへ行っても、日本ほど安心して生活は出来ません。これらのキリスト教諸国は、長年にわたるキリスト教文化にもかかわらず、あの程度の道徳観しか持ち合わせておらず、あの程度の社会しか作ることができないでいるのです。それに比べると、日本人は聖書を知らず、天地創造の神も知らないのに、これだけの道徳観を持ち合わせ、これだけの社会を作っているのです。

いったいどうして、そのようなことがあり得るのでしょう。理由はたくさんあることでしょう。先に述べたように、長年にわたって隔離された土地で定住生活を営み、共同体生活をしてきたことも、大きな要因です。ただ、ここでは聖書の記述から言えることに注意を払いたいと思います。

Ⅳ．Ａ．人間の堕落の理由

人間が堕落してしまった理由は、聖書によると二つあります。一つは良く知られているように、人類の祖、アダムが罪を犯してしまったことによるものです。ひとりの人によっ

て、罪が入ったという事実がパウロによって強調されている通りです。(ただし筆者は、アウグスチヌスによって唱えられた、遺伝のように罪の性質を親から引き継ぐという、原罪の教理を否定します。罪の性質は遺伝によるものではありません。むしろ、罪の結果として人間性に歪みを生じ、神から追放され、神の支配から悪魔の支配に移された結果として、すべての人間は罪を犯すのです)

もう一つは、ローマ書第１章に記されていることで、あまり多くのクリスチャンの注意を引いていないことです。そこで語られているのは、人間が創造者である神の朽ちない栄光を、朽ちる人間や獣や鳥や這うものの像ににせて、偶像礼拝を始めたために、神は人間を、自分たちの欲望のままに生きるように、正しからぬ思いに渡してしまわれたという事実です。このために、人間は性的混乱を始めとして、あらゆる罪に耽（ふけ）るようになったのです。

第一の理由は、日本人にもそのまま当てはまります。第二の理由も、パウロが語っているように、一般的にはすべての人間に適用できますが、日本人には当てはまらないところがあります。例外と言っても良いかと思います。日本人は、他の民族や部族、あるいは国の人々とは違って、見えない神の不朽の栄光を人間や獣や鳥や這うものの像に似せたり、それらを拝んだりしてはいないのです。そのために、多くの民族や国家ほどに、ひどい道徳的腐敗に、陥っていないと考えられるのです。日本人が聖書を持たず、絶対に聖い正義の神である創造者を知らないにもかかわらず、多くのキリスト教諸国よりも高い道徳性を維持している最大の理由は、そこにあると考えられるのです。

Ⅳ．B．日本人の宗教意識を理解する必要性

西欧の宣教師たちや、彼らに指導を受けた日本人牧師たち、あるいは西欧の神学を学んで、何の疑いもなくそのまま受け入れている日本人牧師たちの多くは、日本人を偶像礼拝者だと決めつけ、神道を偶像教だと糾弾します。でも、それは大きな誤解です。日本人の宗教を表面だけを見て、決め付けているだけです。というより、先に触れたように、「西欧キリスト教国」の人々は、自分たちの文化を「キリスト教文化」であると思い込み、世界中で最も優れた文化だと勝手に考え、それを世界中に広めることに使命感を持っていました。だから宣教師たちは、はじめから、赴任した宣教地の文化などを学ぼうとはしなかったのです。たとえ学んだとしても、それは攻撃して破壊するための、弱点、欠点についての学びだったのですから、本当の意味で、日本人の宗教を理解することは出来なかったのです。

いま私たちに必要なのは、もっと公平な学びです。西欧キリスト教の独善的先入観を持

った学びではなく、真摯に、日本人の宗教と宗教心を学び、正当に評価し、理解と同情あるいは共通意識をもって、私たちの知っている福音を提供することです。

Ⅳ. C. 日本人の「神」

日本古来の宗教であり、日本人の精神的苗床である神道は、他に言葉がないために「神道」と呼ばれていますが、本来、「神」を祀る宗教ではありません。これは日本人自身が気づかずにいることであり、神道の専門家も気づかないままにいることだと思います。多分そのような宗教の研究自体が西欧の学問であり、西欧的な見方しか出来ないからだと思われます。薄々、感じてはいるのですが、言葉で表現できないでいる感覚です。そのあたりを、私たちは良く分析して理解する必要があるのです。

いくども語ってきたことですが、日本人にとって神とは単に「上」という意味です。川上の「かみ」、髪の毛の「かみ」、薩摩の頭の「かみ」、肥後の守の「かみ」、「うちのかみさん」の「かみ」、みな「うえ」という意味の「かみ」です。通常の人間より少しうえの能力を持つ者は、すべて「かみ」となり得るのです。したがって、料理の「かみ」も、野球の「かみ」も、手術の「かみ」も「あり」です。去年の７月と８月だけで１ｋｇから2.5ｋｇのチヌ（正確にはチヌときキビレ。夏場はキビレが旨い））を４０尾以上釣り上げた筆者は釣りの「かみ」です。非常に曖昧で、混乱しているとはいえ、本当は、神道が祀る神はこのような、「うえ」と言う意味の神ではないのです。

「うえ」という意味の神々があるということでは、日本はたしかに多神論の中に生きています。ただし、この「かみ」の概念は、西欧のキリスト教神学で言う「神」とはまったく異なるのです。これはむしろ、聖書で言うみ使い、悪魔、悪霊、あるいは幽霊の分野に属するものです。ただ、アニミズムの社会ではそのような「うえ」の存在が「神と呼ばれるのです。ですから、聖書も「神々」という言葉を使っているわけです。これを勝手に西欧キリスト教の感覚の神と混同して、日本の宗教を見ているのです。天地を創造されたお方を、「神」と翻訳したことに混乱の始まりがあることは、多くの人たちが指摘している通りです。

日本人のこれらの「かみ」に対する取り扱いは、宗教と言えるかどうかぎりぎりのところでしょう。たしかに、動物を「かみ」として祀っている場合もありますし、縁結びの神、子宝の神、安産の神、というような様々な神もあり、それらを祀った神社もあります。これらは確かに宗教といえるでしょう。ただこれらの神々の多くは、通俗化され民話化された、「うえ」という神々に属するもので、次に述べる、それらの神々とは次元の異なる、崇高な存在者とまったく違う概念なのです。あるいは後で述べるように、次元の異なる崇高

な存在者の「権化としての神」なのです。

日本人自身があまり自覚していることではないのですが、日本人にはそれらの神々とは異なった存在者に対する、厳粛で荘厳な宗教心があります。それは西行法師が、「なにものがおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」と、詠ったお方に対する思いです。日本人はあまり良く分からないまま、説明も何もできないまま、このお方を心の奥深くに感じて大切にしてきたのです。よく分からない方、いるともいないとも説明がつかず、何とお呼びしたらよいかも分からず、どのように祀り、どのように崇めたらよいのかも分からない、大きく、高く、尊く、奥ゆかしい方を、本能的に感じて畏れてきたのです。太陽を昇らせ、雨を降らせ、穀物を稔らせ、野菜や果物を実らせ、家畜を育て、すべての良いものを与えてくださっているお方、春を与え、夏を来させ、秋をめぐらせ、冬を訪れさせ、それぞれの季節に喜びを与えてくださる方を、心の深いところで感じ、思わず手を合わせ、歌を歌い、踊りを踊り、感謝の祭りを催して来たのです。

日本人は、深山に入ってはこのお方の存在を全身に感じ、星空を仰いでは静寂の中にこのお方を感じ、荒海に乗り出してはこのお方を感じてきました。何につけても、どのようなもののなかにも、この方の存在を感じ、すべてのものの中に潜んでおられると思ってきました。ただ、このお方に関して教えてくれる人は誰もおらず、書物を訪ねてもどこにも記されていません。そこで、自分なりに宗教的な表現をすると、ついつい、神々に等しいような低級な表現になってしまうのです。たしかに日本には、そのような、見えない栄光のお方を何とか表現しようとして、「神々」の感覚に堕落しかけたものがたくさんあります。古事記や日本書紀に記された神話がその良い例です。

宣教師たちはそのような日本人の感覚を、汎神論だ、多神論だと言い、間違った宗教だと断定して非難してきました。でも、聖書によるならば、私たちの神はすべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内におられるお方なのです。汎神論であるとは言い切れませんが、汎神論的側面を持つのです。多神論とはなりきっていませんが、多神論的感覚を持つのです。西欧のクリスチャンたちは、神はすべての被造物をご自分の対象として、ご自分の外にお造りになったかのようない錯覚していますが、無限の神の外などはあり得ません。

神はすべての物をご自分のうちにお造りになり、そのすべてのものの中に満ちておられるのです。神は全宇宙の中にお住みなのではなく、全宇宙は、神の内に存在を許され、全宇宙は神で満ちているのです。パウロも当時の異邦人の言ったことに同意しているように、私たちはみな、神の中に生き活動しているのです。そしてこの神は、さまざまな形でご自分を現しておられるために、多くの神様がいらっしゃると勘違いされる場合さえあるので

す。

Ⅳ. D.　日本人が感じている主なる神

日本人が旨く説明できないままにも、心の深いところでかすかに感じているお方は、天地の創造者として聖書で自己紹介をしておられる、主なる神に違いないのです。天地の創造者、万物の創造者である神は、自らご自分について明らかにされたとパウロは言い、それゆえに、神について知り得ることは人間には明らかであると語っています。神の目に見えない本性、神の永遠の力と神性は、世界の創造されたときからこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められると教えられています。日本人は、たとえ不充分ではあっても、この方を被造物によって、すなわち自然、万物を通して、主なる神を知って敬っているのです。アテネの人々が「知られざる神」を拝んでいたのを知ったパウロは、あなた方が知らずに拝んでいる神について話そうと、語りかけました。アテネの人々が知らずに敬っていた神が、パウロが信じ宣べ伝えていた神であると言えたのならば、日本人が昔から崇めてきた目に見えない神、言葉でも表現できない神は、間違いなく私たちの神と同じ神だと言えるのです。

日本人はこの目に見えない朽ちない栄光のお方を、朽ちる人間や獣や鳥や這うものの像に似せて造ってはおらず、それを拝むこともないのです。日本人は心の深いところでかすかに感じるこのお方を、目に見えないまま、口では言い表すことができないままにしておくことを選びました。パウロが非難する人類一般とは少しばかり違って、人や獣や鳥や這うものの像に似せることはしなかったのです。日本人にとって、そのようなことは畏れ多くて出来ないのです。西欧のキリスト教神学が、知識偏重のギリシヤ思想に影響されて、饒舌に神について語るのを聞いても、やたらに聖いお方の名を口にする不敬にあたると感じるだけです。このような日本人的畏敬の思いを持たない海外の有名な牧師が、講壇の上でポケットに手を入れたままお祈りしたのを見て、何人もの日本人クリスチャンが「躓いた」ことがありますが、一般の日本人ならもっと多くの人が躓き、もっと激しく反発したことでしょう。

日本人は、この大きく、賢く、気高く、貴い方を言葉でも形でも表現できないと感じてきました。だから、神道には神学がありません。神道を奉じている日本人たちの頭が悪いのではありません。人間の能力では、この大きな方を把握することが出来ず、人間の言語ではこの賢い方を表現できないと知っているのです。西欧の神学が、まな板の鯉を刻むように、あるいは今流で言うと、CT スキャンで体中を切り刻んで調べるように、神について饒舌に語ることに疑いを抱くのです。ミケランジェロが、アダムを創造して息を吹き込まれる神の姿を壁画にしていますが、神を初老の男性の姿で表わすような、畏れ多い感覚を

嫌うのです。そのように表現できるのは、「かみ」であって、日本人が心の奥でひそかに感じている、尊い方ではないのです。

普通、日本人は八百万の神々といわれる多神教を信じているといわれますが、この神々は、天地創造の神とは次元の異なる単なる「うえ」の存在で、同じ土俵で論じてはならないものなのです。ただ、天地の創造主を表す日本語の「神」にしても、ヘブル語の「エローヒム」あるいは単数形の「エル」にしても、周囲の人々の低い神観念の「神」という言葉を借用せざるを得なかったために、どうしても、混乱が起こっているのです。クリスチャンたちが天地創造の神を畏れ敬っているように、日本人が恐れ敬っているのは、「かみがみ」の神ではなく、目に見えないまま、口でも表現できないままにしている気高く貴いお方なのです。

宗像神社が大切にする沖ノ島には、仮に「おいわずさま」と呼ばれる神がいらっしゃることになっています。畏れ多くて、お名前をつけることも、お呼びすることも出来ないという意味です。イスラエルの歴史では、天地の創造者である神の名を口に出してお呼びするのを恐れ、主、あるいは天と表現してきました。自分たちの神を表現する名前は、書くことには書いたのですが、畏れ多くて読むことが出来なかったために、とうとう、どのように発音するのか分からなくなってしまいました。数千年もあとになって、学者たちは、これは「エホバ」と発音すると考え、一時、エホバという言葉で呼ばれるようになりましたが、その後、さらに学びを続けた学者たちは、これは「エホバ」ではなく「ヤーウエ」であると言い出し、今では「ヤーウエ」が受け入れられています。日本人は、そのように畏れ多くも尊いお方を、絵に描いたり偶像にしたりするようなことは決してなかったのです。

Ⅳ. E.　日本人の「上」なる神々と、崇高な見えないお方

日本の有名な神社を訪れてみてください。神殿の中に偶像はありません。日本人の拝む神は、目に見えないままの神なのです。宮司さんに尋ねてみてください。「神様とはどのようなおかたですか？」　満足な答えは得られないはずです。畏れ多くて、人の言葉で説明できるような方ではないために、神道には教理も教義もないからです。あえて人間の幼稚な頭と言葉で説明すると、古事記や日本書紀に出てくるような、擬人化され俗化され、私たちの畏敬と憧憬を受けるには、ふさわしくない神々になってしまうのです。ですから黙って敬っておく以外にないお方なのです。日本人の奥ゆかしさ、話すのに遅い性格は、このような目に見えないお方に対する畏れの心から、出ているのではないかと感じるほどです。

日本人は目に見えない神を目に見えないまま、敬い、礼拝してきました。その理解も礼拝の仕方も奉げものの仕方も、聖書によって教えられた西欧キリスト教からすると、稚拙かもしれません。しかしそれは非常に大切な「偶像を用いない礼拝」、目に見えないお方を目に見えないままに礼拝する礼拝です。神はこのような日本人の神意識、神礼拝を認めてくださり、他の民族にされたように、ただ欲望のままに生きるように、欲望に引き渡されるようなことは、なさらなかったのではないでしょうか。だから、日本人の道徳意識は高く、社会は平穏で犯罪が少ないのです。

この目に見えない栄光の創造者を、私たちクリスチャンは普通、神様とお呼びし、キリストが言われたように、天のお父さまとお呼びするのですが、日本人は、神様を信じるクリスチャンが、他の神々を攻撃するのを不思議に思い、理解できないで来ました。日本人にとって「神」とは、たくさん存在する「上」のものに過ぎないからです。クリスチャンが言う神様も、特別な説明がないならばそのように理解するのです。そういう神々は、平和共存できるはずなのです。

日本人が「神様」というとき思い起こすのは、あちらの神社こちらの社に祀られている神様です。天神様や八幡様、宗像神社に祀られている神様、住吉神社に祀られている神様などです。謂れをたどれば、それらの中には有名な文化人もいれば武将もいます。そしてそれらの神社を訪れても、日本人はそこに祀られている神様がいったいどのような神様であるかなどということに、あまり頓着しません。それらの神を説明する教義もなく、礼拝の対象の偶像もないのです。日本人はどこの神社に詣でても、どの神を参拝するのでも、まったく同じ心で同じように祈るのです。祈る対象のお名前はどうでもいいのです。

それを感違して、日本人にとっては祈る対象はどうでもよく、祈る気持ちを大切にするのだ。日本人の宗教意識は観念論的だとも言う人たちもいます。確かに観念論的な部分があります。でも日本人は、よく分からないままにも、祈る対象を大切にしています。神社などでは、そこに祀られている神様に祈るのではなく、その神様に象徴されている見えないお方、その背後にいらっしゃる、もっと大きく、もっと気高く、もっと力強く、もっと慈しみに富んでおられるお方に祈っているのだからです。

日本人にとって、多くの神社に祀られている神々は、自分の心に感じている本当に気高いお方ではなく、そのお方の仮の現れ、仏教の言葉を借りると「権化」に過ぎないのです。そのように簡単には片付けられない、多くの物事もありますが、これが極めて単純化した基本です。西行法師は、伊勢神宮にお参りしたとき、そこには天照大御神と、豊受大御神が祀られていることを知っていたことでしょう。でも、「なにごとのおわしますかは知らねども」と詠んだのです。

天照大御神は太陽の化身だといわれますが、太陽そのものを、自分の心の奥深くに感じている気高いお方であるとは考えなかったために、「なにごとのおわしますかは知らねども」と、素直に自分の心を吐露しているのです。したがって、天照大御神を太陽の化身であるというのは、正確ではないでしょう。むしろ、最も強く、また、大きな恩恵を与え続けている太陽を、目に見えない大きく強いお方、すべてのものを生かす命の源であるお方の象徴として祀ったのでしょう。太陽のなかに、そのお方の神秘的な存在がもっとも強く感じられたのです。また豊受大御神は衣食住に関わる神ですが、これは最も身近で必需の高いものを与えてくださる、良くはわからないけれどあり難いお方を象徴したものでしょう。

したがって日本人の多くは、そこここに祀られているたくさんの神々を信じているのではなく、あたかも多くの神々のように現れている、唯一のお方を信じ崇めているのです。そのお方が自分の心にも感じられ、山にも海にも木にも花にも潜んでおられると感じられるのに、言葉にも絵姿や像にも表現できない方であるため、たとえば、圧倒的な存在である太陽をもって象徴したのでしょう。それを知っていても、その象徴されているお方がどなたか分からないために、「なにごとのおわしますかは知らねども」と手を合わせるのです。

もちろん、ほとんどの日本人は自分の神概念を、理論整然と語ることは出来ません。非常に曖昧なのです。曖昧にしておくところが、むしろ気高く貴いお方を畏れている態度として、ふさわしいという思いがあるため、そしていろいろな考え方に束縛されることなく、自由な宗教行為が出来るため、そのままになっているのです。神道にはこれと言った倫理もなく、ただ、心の奥底に感じる貴い方を崇めるだけなのはそのためです。ですから、私たちの側から、その日本人の曖昧な神意識を少しだけ整理してあげれば、かなり理解してくださるのです。日本人の良心は、そのような宗教心とも強く繋がっています。

曖昧な神観であるために、良心さえ曖昧なところがあります。しかし、目に見えない貴い方に、ありがたいという気持ちを持っています。そのありがたいという気持ちを、きちっと表わしてこなかった、どうしたらよいか分からなかったために、おざなりにして来た、あるいは不義理を重ねてきた点で、お詫びをしなければならないという気持ち、深い罪意識を引き出すことは可能です。

Ⅳ．F.　日本人にあった福音の伝え方を探るために、西欧型神学を見直す

私たちは、西欧人の考え方と西欧人の文化に合わせて構築された神学で、日本人の伝道を考えるのではなく、もっと、聖書の語っていることを正しく理解し、日本人を理解し、

日本の宗教を含めた文化を理解し、最もふさわしい形で日本人に福音を語りたいものです。私たちが受け継いだ西欧の神学の多くの部分が、実は聖書の教えとは異なっているのです。

西欧神学の基本的部分は、聖書が手に入らなかった長いカトリックの暗黒時代に、聖書とは関係なく形成されたものです。それがおかしいと疑問に感じた人たちが、聖書の権威を信じて、聖書に沿った神学を構築しようとしてきました。それがプロテスタント神学です。しかし彼らは、自分たちが疑問に感じたことについては、熱心に聖書を調べ、あるていど聖書的な神学を構築したのですが、疑問を抱かなかったことがらについては、何の聖書的考察も加えずに、そのまま受け入れてしまっているのです。たとえば、原罪の教理、たとえば幼児洗礼の教理、たとえば聖餐にまつわる教理、さらに教会に関する教理、再臨に関する教理など、かなりの数のプロテスタント教会が、あまり疑念を抱かないまま、聖書とは関係のないところで作り上げられた神学を、伝統としてそのまま受け入れ、それを基礎にして福音を理解し、伝道の働きをしているのです。

いま私たちは、日本という異文化の壁に直面し、新しい神学的理解の必要を感じています。神学校や聖書学校の教育も、西欧型の神学を教えて満足するのではなく、もっと西欧の伝統を離れ、異邦人という視点で聖書を読み、律法を与えられていないものの感覚で理解したいものです。西欧的な感覚の伝道ではなく、日本人の心理、日本人の宗教観、日本人の神意識、日本人の価値観など、福音を伝える相手のことにもっと重点を置いた伝道について考えるべきです。

V.　日本人を裁く方

日本人が罪人に過ぎないことは明白です。日本人も神の公平な裁きの対象です。でも日本人は律法によって裁かれるべきではなく、西欧の神学によって裁かれてもならず、西欧宣教師によって裁かれてもいけないのです。日本人の文化、日本人一人ひとりの育ち、教育、環境など、あらゆる要因を正しく理解し、それぞれの心に記されている神の律法と、そこから様々な条件の中で派生してくる良心をきちっと把握した上で、正しくお裁きになるお方は、天地を創造し、人間をお造りになり、その心に律法を記してくださったお方だけなのです。

V．A.　悔い改めと伝道

私たちは、救いのためには罪の悔い改めが必要だと信じていました。ですから、やたらに罪を責めました。嫌われても、反撃されても、とにかく罪の自覚を生じさせなければ、悔い改めはあり得ず、悔い改めがなければ救いはないと考えていたために、罪、罪、罪と

言い続けました。でも、アブラハムは罪の悔い改めなどに関わりなく、キリストの十字架も知らずに、ただ神に信頼することによって救われたのです。その事実をもっと真剣に考えるべきです。アブラハムはキリストを知らなくても、キリストの十字架の贖いのお陰で救われたのです。たとえアブラハムはキリストを知らなかったとしても、神が、贖いの御業を完成されるキリストをご存知だったのです。アブラハムに必要だったのは、ただ神を信頼することだけでした。神が救いを準備して、信頼にお応えになったのです。

私たちは、悔い改めに至らせるためにまず罪の自覚を生じさせようと、やたらに罪を責めることによって、福音を福音ではなくしてしまったことも、一度や二度ではありません。罪人と言われた日本人の多くは心を閉じ、福音に耳を貸さなくなってしまったのです。しかも、腹も立てずに聞いてくださり、自分が罪人であると認めてくださった人たちの罪の自覚も、絶対の神の存在を前提にしていないために、嘘をついたことがある、万引きをしたことがあるといった程度の、浅薄なものでした。本当の意味の罪の自覚ではない場合が多いのです。

本当の罪の自覚は大きな方、絶対の方、そしてまた愛と哀れみに富んでおられる方を体験として実感し、初めて持つことが出来るものです。西欧神学で教育された私たちは、それを旧約聖書の律法を持ち出して、知的にやろうとしてきました。でも、日本人に罪の自覚を生じさせるために持ち出すべきものは、３千年も前にユダヤ民族に与えられた旧約聖書ではなく、今も異邦人の心に記されている神の律法であるべきなのです。

V.B.　心に記された律法に目覚めさせて悔い改めに至らせる

そこで、「その良心に照らし合わせて、あなたは恥じない生活をしていますか？　自分の良心が要求する高い基準の生活をしていますか？　それができていないというのなら、残念ながら、あなたも私と同じように、自分の基準に足りない人間ですね。その良心は、天地を造り人間を造ってくださった神から与えられた、人間の聖い性質から出てきたのです。それを聖書は心に記されている律法と呼んでいます。あなたは、あなたの心の律法に対して、恥ずかしい生き方をしていないでしょうか。そうだとすると、残念ながら、あなたも罪人だということになりますね。でも、神は罪人を愛し、罪人を救うために、あらゆる努力を重ね、救いの道を準備してくださっているのですよ」と、福音を語ることが出来るのです。

「天地をお造りになった神は、昔から日本にもいてくださり、日本を愛し、日本を祝福してくださっています。日本ほど豊かな自然を持っている国も少ないのですよ。この神様は、本来、単なる『うえ』という神様ではなく、日本人の多くが心の奥深くで感じて崇め、感

謝を捧げてきた貴いお方です。ただ、あまりにも気高く畏れ多いお方、あまりにも貴く聖いお方なので、私たち日本人は、その方を言葉で説明したり姿かたちを造ったりすることはおろか、お名前をお呼びすることもなかったのです。あなたも日本人ですから、まじめに自分の宗教心を見つめるとき、自分の心の最も深いところに、この大きな気高いお方がいらっしゃることを感じてきたことでしょう」とお話しすると、多くの日本人が頷いてくださるのです。「その大きく気高い方に、あまりふさわしくない生き方をしてきたとはお思いになりませんか？　私たちには、このお方にお詫びする必要がるようですね」と、もっと日本人に馴染みのある言葉で、悔い改めを勧めるのです。私たち外部の人が悔い改めを迫るのではなく、自分からお詫びの必要性に気づくようにしてあげるのです。

Ｖ．C.　悔い改めの場を設ける

このように日本人に対して語って行くことが出来る機会は、日本人の地域共同体や、家庭を大切にした交わりの伝道ではないかと思います。教会が主催する様々な交わりにお誘いし、共通の話題や必要に対する取り組みでよい人間関係を作り、その交わりの中で、私たちの信じる神は日本人が知らないままに崇めてきた神であることを教え、この神についてもっと積極的に学び、この神を体験し、この神に従う喜びを分かち合うのです。

西欧型の、罪、悔い改め、キリストの十字架、甦りを最初に持ってくる「裁きの伝道」あるいは「知的同意の伝道」から、日本の文化と習慣、宗教意識を大切にした「共通意識の伝道」、まず神の素晴らしさを実感してもらう「体験の伝道」に切り替えるべきです。欠点を指摘し、罪を責め、悔い改めを迫る伝道から、日本人の素晴らしさ、日本文化の美しさ、日本的宗教観の気高さを認め、むしろ賞賛しながら、罪の自覚に持っていくのです。

従来の悔い改めを迫る伝道は、拒絶する伝道です。それでは共同体意識、所属することを大切にする日本人には受け入れられません。楽しい交わりの場を設け、私たちは一緒だ、同じだ、理解し合えているという意識を作り上げて、罪に気づいてもらうのです。私たちは罪を指摘して裁く人間ではなく、同じ罪人であると語り、ただ、今は罪を許されて喜んでいるとお話してあげるのです。

でも、その前に、私たち日本人は、神様から多くの祝福をいただいてきたことを理解させましょう。そして、もっともっと、神様を個人的に体験できるように、信頼することを教えてあげましょう。まず、神様をもっとたくさん体験することです。そうするならば、穏やかに、そして感動を持って、自分が罪人であることを認めることが出来るのです。

結び

私たちが受け入れてきたキリスト教は、聖書の教えそのままではありません。西欧キリスト教文化で構築されたもので、聖書に根ざしてはいるけれど西欧型の理解もあれば、まったく聖書とは関係のないところで構築され、伝統として残ったものもあります。

どのようにしたら救われるかという理解も、私たちが教えられてきたのは、必ずしも聖書の教えと一致するものではありません。私たちはその聖書と一致していない部分で、日本人を傷つけ、躓かせてしまい、救いから遠ざけてきてしまいました。もっと聖書の教えに沿った福音の提示の仕方に戻りたいと思います。

日本人に対して福音を提示するときは、従来のように西欧の神学に従って、旧約聖書をもって日本人に罪の自覚を持たせようとするのではなく、むしろ日本人自身が、自分で、自分は罪人であると自覚できるような方法を採るべきです。

それはすべての人間に与えられている、心に書かれている律法に訴える方法です。日本人も、この心の律法をしっかりと認識しているのです。そして、その心の律法から派生してくる、日本人の倫理に訴えるべきです。多くの日本人は、旧約聖書の律法に照らして「罪人だ」と言われると反発し、躓き、嫌悪感を持つことでしょう。しかし、自分の心にある律法に照らし、自分の良心で自分自身を裁かせると、自分の罪を認めることでしょう。

その心の律法が人類に普遍的なものであり、人間に本能として与えられているものであることを理解させ、日本人が心の奥底に感じている気高いお方、貴いお方の、聖さが写し与えられているのであるということを知ってもらうと、外国から来た神についてではなく、日本人が昔から感じ、感謝し、崇めてきた大きなお方に、お詫びをすることが出来るのです。

私たちクリスチャンは、日本人が心の奥深くで感じ崇めてきたお方を、偶像と言って責めることを止めるのが肝要です。そのお方は単なる「うえ」の存在の神ではなく、言葉でも形でも表現できない気高いお方なのです。聖書が天地創造の主として崇めることを求めているのは、日本人が心の奥深くで感じ、尊び、崇め、感謝してきた、このお方なのです。

日本人が曖昧な宗教意識で、「うえ」の存在を神々として語ることを理解し、さらに、言葉でも形でも表せない貴く気高く、まったく次元の違うお方を感じていることに、私たちがまず気づきましょう。その上で、優しく日本人に語り気づかせてあげるならば、日本人は、天地を創造された主を受け入れ、信頼することが出来るのです。そのような信頼を、天地の創造主は喜んで受け入れ、義としてくださるのです。

　アブラハムが義とされたとき、キリストのことは何も知りませんでした。私たち日本人が義とされる時も、キリストのことを何も知らない場合もあり得るでしょう。ただ確かなことは、アブラハムはキリストを知らなかったとしても、キリストはアブラハムの時よりもずっと前から生きておられ、アブラハムの時代にも、アブラハムと共におられ、アブラハムを良く知っておられたように、いま、私たち日本人と共に生きておられ、一人一人の日本人をご存じだということです。